

資料館だより

since 1967

令和6年度特別展

「成城の歩み 100年」

—会期 令和6年10月26日(土)～12月16日(月)—

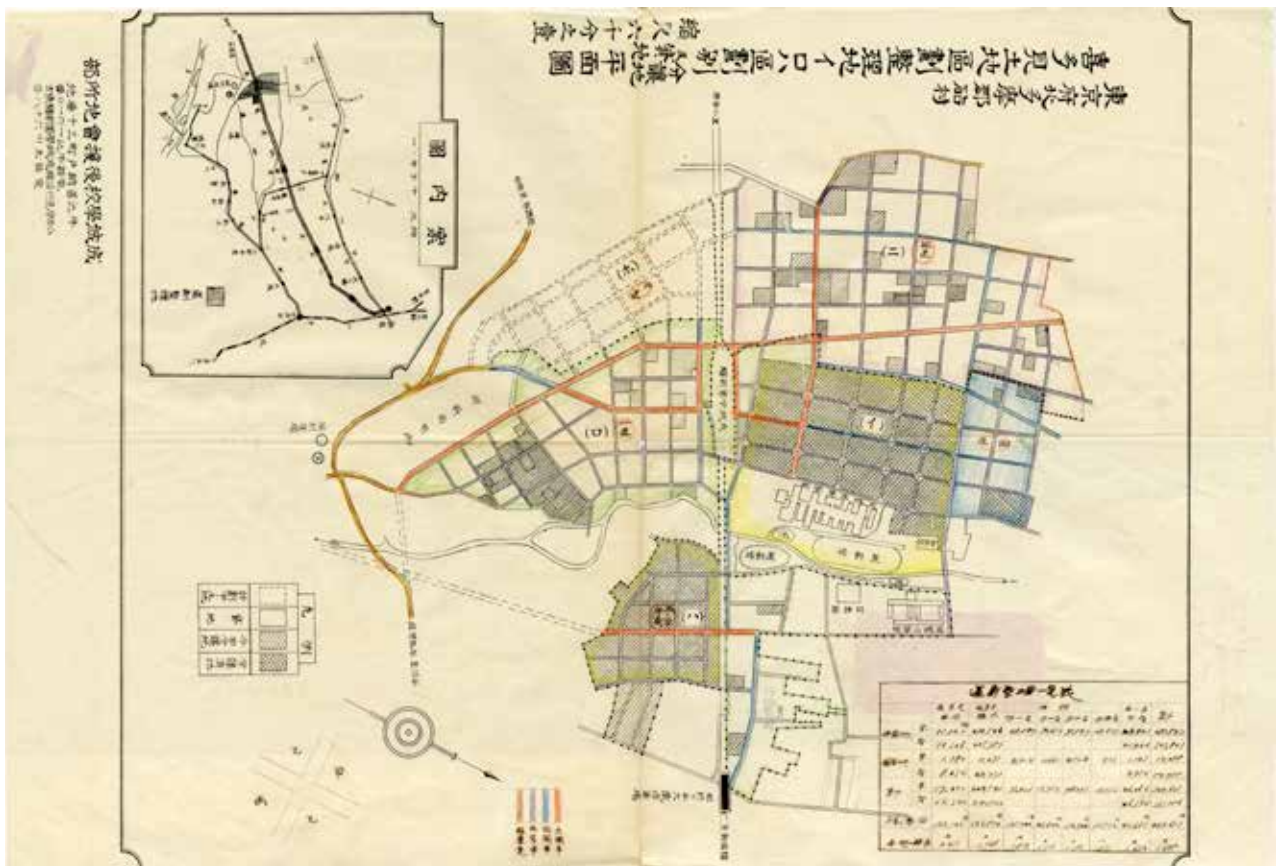


図1 東京府北多摩郡砧村喜多見土地区画整理地イロハ区画別分譲地及貸地平面図 縮尺六千分之一 昭和初期
成城学園教育研究所蔵

本年度の特別展は成城の歴史に焦点をあてます。簡単にその歴史を紹介すると、今から約100年前の大正14年(1925)、成城第二中学校(現成城学園)は、総合学園を目指すため牛込区(現新宿区)から現在地に移転し、その一歩を踏み出しました。移転先は当時の砧村喜多見(現成城)で、雑木林や畑が広がる土地でした。成城学園※1の教師や保護者自らが、地主等の協力を得て区画整理やまちづくりに携わった点で、他の地域の開発とは大きく異なります。

また、昭和初期には小田原急行(現小田急電鉄)の開通や、東宝の前身である写真化学研究所の建設に伴い、多くの文化人等が移住しました。その後、郊外住宅地へと発展し、昭和46年(1971)に地名は「成城」となりました。

本展では、第1章 成城学園とまちづくり、第2章 小田急線の開通、第3章 世田谷と東宝撮影所の3部構成とし、

歴史をご紹介します。

なお、本稿では各章の概要と見所について解説します。詳細はぜひ図録をご参照ください。

※1 財団法人成城学園の設立は大正15年（1926）3月ですが、郊外移転と住宅地開発はそれに先行して始まりました。しかし、本展示では、後の成城学園に直接連なっていく動きの中では「成城学園」、「学園関係者」という名称を使用しています。

第1章 成城学園前とまちづくり

成城学園の喜多見移転前後における土地区画整理や分譲計画、朝日住宅展覧会の開催など、雑木林から学園都市へと変化していく過程について、図面や近現代の資料から紹介していきます。

成城の特徴の一つは、喜多見に移転する際、成城学園の教師及び保護者自らによってまちづくりが行われたことです。大正12年（1923）、生徒の保護者によって後援会が組織され、特に後援会地所部は土地区画整理の実務を担当し、土地分譲の区割りや購入者の募集などを行いました。地所部が出した通知や多くの図面資料などから、当時のまちづくりについて状況をうかがい知る事ができます。

土地分譲の申込みは成城学園職員及び保護者を優先とした上で、大正13年（1924）3月に土地分譲について案内を出したところ、想定の数以上の申込みがありました。そのため、第2回目の分譲計画を立て地主と土地の売買について交渉を進めたものの、価格の折り合いがつかず、十分な土地を準備することはできませんでした。

結局、大正13年5月25日に、成城小学校において、家を建てる時期と申込者の希望する土地坪数でそれぞれ抽選が行われ、購入する区画が決められました。このように、後援会地所部が中心となって土地分譲の計画や実施が進められました。



図2 学校附属住宅敷地い之部区画実測平面図 縮尺二百分之一 昭和初期 成城学園教育研究所蔵

第2章 小田急線の開通

小田原急行鉄道（現小田急電鉄）創業者の利光鶴松は、東京市議員時代から東京市内の交通問題に関わったことをきっかけに、実業界へ転身後は多くの電鉄事業に関わるようになります。利光は大正12年に小田原急行鉄道を設立し、昭和2年（1927）、全線（現小田急小田原線）82km余をわずか1年半足らずで完成させました。また、利光は、従業員採用にあたっては経験者ではなく、出身である大分県と沿線の住民から募集する方針をとつ

ていたことから、喜多見の住民にとっては大きな就職口でもあったようです。

展示では、小田原急行鉄道の沿線名所案内も出陳します。昭和初期に旅行ブームが起こったこともあり、様々な観光案内図が作成、配布されました。特に、鳥が上空から斜めに見下ろしたように描く鳥瞰図を取り入れた案内図は大変人気でした。小田原急行鉄道の観光名所は何といても小田原・箱根がメインですが、今回のテーマである成城学園のキャンパスも描かれています。

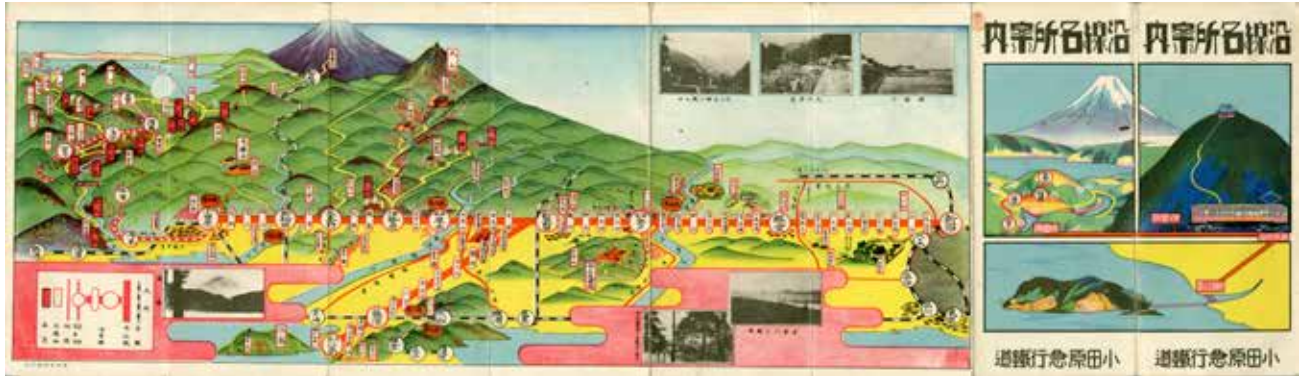


図3 沿線名所案内 小田原急行鉄道 昭和4年(1929)

第3章 世田谷と東宝撮影所

昭和7年(1932)に、発声・無声映画の作成、及び録音の請負、写真の現像などを行う技術会社として、株式会社写真化学研究所が設立されました。この会社が現東宝株式会社の前身になります。

その後、資本を同じくする4社の合併により、昭和18年(1943)に東宝株式会社を設立すると、従来のスタジオは東京東宝撮影所(現東宝スタジオ)と改称され、映画『七人の侍』や『ゴジラ』など様々な名作が誕生しました。

この章の見所は、東宝撮影所と目の前にあった東宝前商店街との関係性です。商店街で、東宝撮影所の従業員はツケ払いで飲食をする他、撮影用自転車の借用、衣装の調達、旅館で宿泊等していました。映画の全盛期である昭和30年代には、夜通しの撮影も珍しくなく、昼夜を問わず人の往来があったそうです。また、商店街の人はツケ払いの回収のため自由に東宝スタジオ内に入りし、試写を見ることもできたそうです。(学芸員 松浦瑛士)

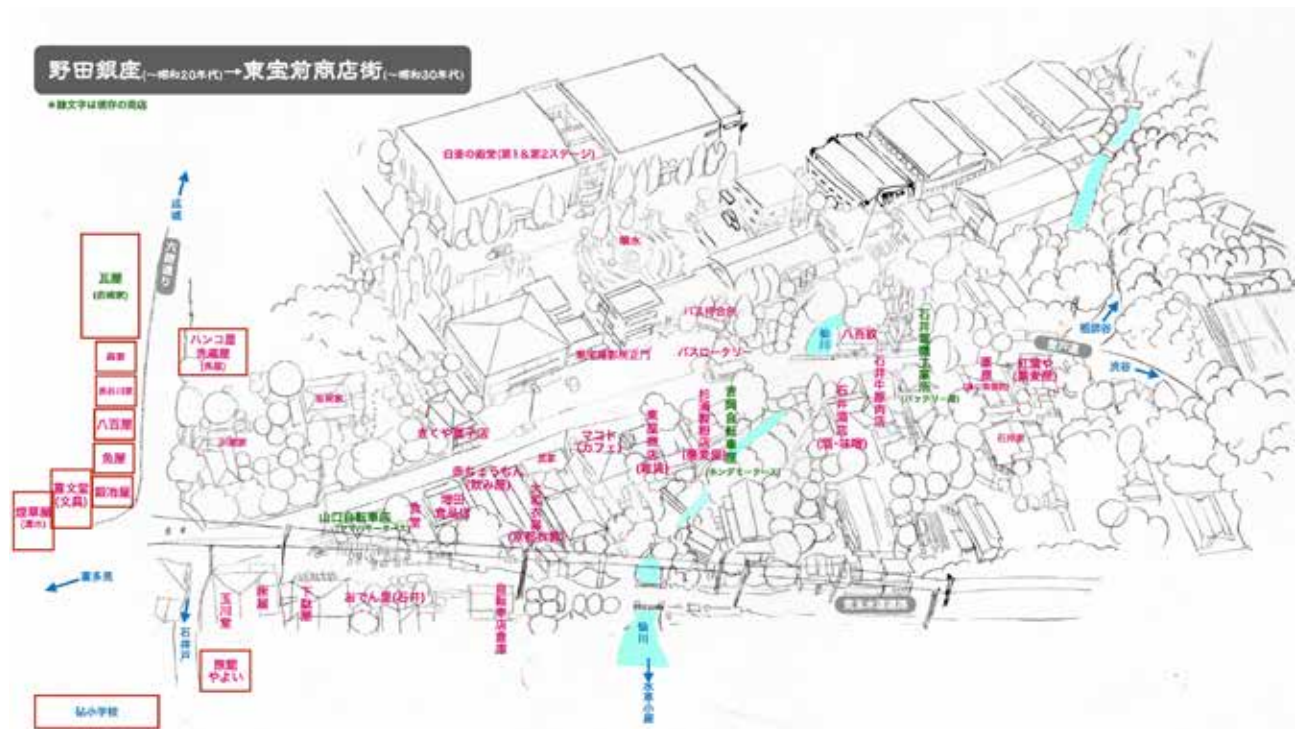


図4 東宝前商店街 MAP (作画: Produce any Color TaIZ/ 岡本和泉)

《展示品解説》 中世の常滑焼骨蔵器



写真1 展示中の常滑焼骨蔵器と副葬品（右端）

世田谷区内では、古代の火葬墓が数多く見つかっており、焼骨を納めた骨蔵器（いわゆる骨壺^{こつぽ}）も、破損品を含めればこれまで20点余りが確認されている。実際には、開発などによってかなりの数が破壊され、人知れず失われてしまったに相違なく、20点余りという数が実態を反映したものでないことは言をまたない。それはともかく、昨今の研究成果によれば、中世に入ると火葬の受容はより顕著になる、とされている。つまりは、社会的高位の者達や僧侶階層だけではなく、受容層がさらに広がったということになる。さすれば、古代をしのぐ数の火葬墓や骨蔵器の発見例があつてしかるべきだが、然^さにあらず。その数はいたって少なく、今のところ区内では、ほんの数例が確認されているにすぎない。当館の常設展示にもその傾向は表れており、古代の火葬骨蔵器4点に対して、中世のそれは、鎌倉時代のものがわずか1点展示されているのみである（写真1）。世田谷区でのこうした出土事情は、いかなる理由によるものなのであろうか。実は、このわずか1点の展示品が、上記疑問を解き明かす有力なヒントを内包している、とあって差し支えない。そこで、展示解説パネルやガイドブックでは触れられていないその辺りについて、ここで補足説明してみたいと思う。

この遺物は、区内有数の複合遺跡として知られる堂ヶ谷戸遺跡（岡本2丁目）から出土したものである（写真2）。昭和50年（1975）に刊行された『世田谷区史料 第八集 考古編』（以下、『区史料』と略記する）によると、昭和48年（1973）1月に個人住宅の新築工事中、擁壁設置のための掘削作業時に板碑が多数見つかったという。残念ながら、その様子は工事関係者からの聞き取りによるもので、出土状況が確認できる写真もなく不明な点が多いのだが、板碑は住宅南側斜面から数十枚がかたまつて出土したと記されている（『区史料』p679）。丁寧に積み重ねて埋められていたようで、斜面上方から押し流されての埋没ではなかったとみられている。しかし、そ



写真2 骨蔵器（常滑焼壺）

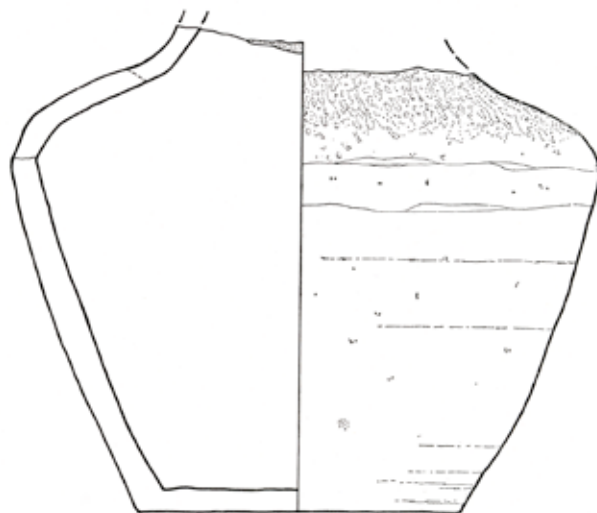


図1 骨蔵器実測図

（『区史料』p166の図を左右反転させた）

れが埋納当初の所作なのか、後世の再埋納によるものなのかはわからない。その数は合計すると47基で、同年6月に一括して郷土資料館へ寄贈された（写真4）。それ以外にも完全な形の板碑や板碑片が確認されていたようだが、破片のほとんどは残土と共に遺棄されてしまったらしい。ところで、板碑がまとまって出土した場所は2カ所あったとされ（両所は6メートル離れていたとある）、その中間から骨蔵器が一つ見つかったという。その骨蔵器が本資料である。常滑焼^{とこなめやき}の壺で、頸部から上^{ふち}が失われている。これは、骨蔵器として使用するための人為的破壊と見做されている。大きさは、現存高15.4cm、胴部最大径約18cm、底部径10.2cmである。器内には黒色土が詰まっていた、それを篩^{ふる}いにかけての結果、焼けた人骨片と銅銭2枚（宣和通宝^{せんなつほう}）が検出された（写真3・図2）。銅銭は副葬品^{ふそうひん}のようで、いわゆる冥銭^{めいせん}（六道銭）とみられる。ちなみに、宣和通宝は中国北宋時代の宣和年間（1119～1125）に鑄造された銅銭で、書体が真書と篆書の二種ある。『区史料』では、壺の制作時期を室町時代、或いは南北朝時代から室町時代初頭としていて、執筆者により少々見解が異なっている。しかし、器形の造作的特徴などからもう少し遡りそうで（写真2・図1）、現在当館では鎌倉時代のものとして展示している。



写真3 副葬品（宣和通宝）

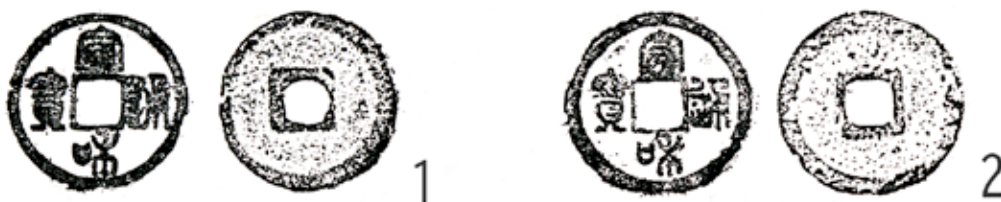


図2 宣和通宝拓本（『区史料』p166より）

この壺が、板碑の多数出土した近辺から見つかった点は重要で、それはやはり板碑との関連が無視できないことを示している。というのも、板碑は本来供養塔として造られたが、やがて墓塔としても多用されるようになる。地面に突き刺す、或いは台石という専用の台にはめ込んで自立させるのが一般的で、この場合、立っている板碑の直下、或いは板碑の脇に骨蔵器が埋納されることは多い（焼骨を容器に納めず直に埋めることもある。なお、古代の火葬墓と比べ、中世のそれは骨蔵器の埋納位置が総じて浅い印象を受ける）。こうした事例は、南関東各地で確認されている。埼玉県行田市の筑道下遺跡で見つかった中世墓群は、多くの板碑と共に、焼骨を納めた陶製の骨蔵器が複数、地面に近いかなり浅い深度から出土している。これは、板碑を伴う群集墓の有り様を具体的に示している好例である。板碑が立ち並ぶという墓域の景色は、南関東の中世にあって見慣れた景観であったに違いない。ところが、こうした板碑群は、中世末から近世初頭にかけてほぼ時を同じくして放棄又は処分され、埋められたり破壊されたり、^{はたまた}将又他に転用されたりして姿を消していくのである（放置されるケースもある）。そのような事態において、板碑の直下やその脇に浅く埋められた骨蔵器となれば、当然多くが無事では済まなかったであろう（勿論、別の所へ



写真4 堂ヶ谷戸遺跡出土の板碑

寄贈品のうちのひとつ。弘安元年（1278）銘の大日一尊種子板碑で現状区内最古のもの。

丁寧に再埋納されたものもあろうが……）。本稿で紹介している常滑焼の壺は、まさにそうした過程の結末を示している存在と見てよさそうに思われる。板碑の放棄又は処分という行為は、浅めの地中までを含めた破壊の程度が、埋められた骨蔵器にも影響の及ぶかなり大きなものだったのではないだろうか。これにプラスして、近代以降の開発などによる破壊も加わってくる。中世の火葬墓が意外なほど見つからない大きな要因の一つが、ここにあると考えられるのである。堂ヶ谷戸遺跡から出土した常滑焼の骨蔵器と多数の板碑は、かつてこの地に、板碑の林立した中世の墓域が存在したことをうかがわせる貴重な物証である。ということは、つまり、この地に存在したであろう中世墓群も、上記と同じような末路が想定できるわけである。同遺跡における今後の発掘成果には、十二分に注意したい。

区内には、他にも比較的多く板碑の出土する場所が複数存在する。喜多見（特に砧浄水場や慶元寺付近）や大蔵（永安寺辺り）、南烏山（烏山念仏堂辺り）、千歳台（東覚院付近）、上祖師谷（安穩寺辺り）、瀬田（行善寺辺り）、尾山台（伝乗寺付近）などである。他所から板碑が多数持ち込まれたとは考え難く、そうであれば、これら出土地辺りに、中世の群集墓が存在していた可能性を考えておくべきであろう。今回紹介した骨蔵器は、このような背景を有する展示品である。そのことを知った上で見学するのとそうでないのとでは、印象や見方や考え方……、何もかもがかなり違ってくるのではないだろうか。

（学芸研究員 鈴木 泉）

【主要参考文献】

- * 世田谷区『新修世田谷区史 上巻』（1962）
- * 世田谷区『世田谷区史料 第八集 考古編』（1975）
- * 世田谷区教育委員会『世田谷区石造遺物調査報告書Ⅰ 世田谷区現存板碑集成』（1984）
- * 行田市郷土博物館『板碑 中世の行田を探る』（2006）
- * 世田谷区立郷土資料館『世田谷の歴史と文化 世田谷区立郷土資料館展示ガイドブック』（2024）

● 夏のミニ展示 ●

涼をとる－館蔵の団扇と扇面を中心に－

会期：2024年8月3日（土）～10月20日（日）

今回は、当館に収蔵されている団扇や扇面を33点ほど展示しました。なかでも、三越が昭和20年代から40年代に得意客へ贈った団扇は、川端龍子かわぼたりゆうしや鏑木清方かぶらききよかたをはじめ、名だたる日本画家の作品13点が揃い、見どころの一つでした。また、「団扇」というカテゴリーの一つとして展示した農業用の大きな団扇「あおり扇」は、意外にも来館者の目を惹いたようで、立ち止まって見られている方が多かったように思います。

かつて庶民の夏の暮らしには欠かせない道具だった団扇や扇子は、エアコンの普及により、最近ではあまり使われなくなりましたが、そこに描かれた絵柄の多くは、目にも涼やかです。猛暑の中、来館された皆様には、少しでも涼んでいただけたのではないのでしょうか。（小林信夫）



〈常設展示〉民俗

夏のミニ展示に合わせて、常設展の民俗コーナーの一部展示替えを行いました。ちょっと昔の夏のくらしを紹介するためです。また8月24日に開催された子ども向けワークショップ「うちわに描こう！」では、この展示内容を参考にして絵を描きました。

エアコンのない時代、暑い夏を過ごすために人々は様々な工夫をして暮らしていました。草簀よしずや簾すだれを使い日差しを遮り、打ち水をして涼をとりました。団扇や扇風機で涼み、行水で汗を流しました。子どもたちは川やプールで水遊びに興じ、おやつは冷たいかき氷やアイスクリーム。街中には金魚売りもいました。こうした夏のくらしを思い出していただけるような当館収蔵資料を展示しました。（渡辺静雄）



〈常設展示〉文芸

文芸コーナーの展示品は、原則世田谷にゆかりある画家や作家の作品、或いは歴史的に世田谷と関わりある作品、資料を対象としていますが、ミニ展示の内容に合わせた例外的な展示も、時に行っています。そうしたわけで、今回のミニ展示開催期間中、文芸コーナーの展示品は、テーマの「涼」にちなんで滝や湖、水中など水が描かれる絵や版画で構成してみました。（鈴木 泉）



～夏休みワークショップ～

● 石器^{さわ}を触ろう！

8月9日（金）、午前と午後に各一回、本物の石器に^ふ触れ、観察する体験学習を行いました。「石器に使われる石（石材）はどんな石だろう？それは、どこで採れるのか？」使用した石器は、世田谷区内の遺跡から出土した縄文時代の石器です。今回は特に、遺跡の近くで採れる石に着目してみました。遺跡の近く、多摩川の河原にある、石器に多く使われる石についてお話をした後、数人ずつのグループで、石器を石の種類ごとに分類してみました。次に、お気に入りの石器をひとつ選んで、観察ノートに記録し、発表。おのおの、石器の色や形、手触りなど選んだポイントは様々でした。実物に触って体感し、新たな興味をもったり、楽しんでもらえる機会を増やしていきたいです。（前田知寿）



● うちわ^{えが}に描こう！

8月24日（土）は、横浜国立大学の河内啓成先生^{かわちけいせい}を講師にお迎えし、「うちわに描こう！」を開催しました。参加者は、うちわの歴史についてお話を聞いた後、展示室で夏らしいものを探して思い思いにスケッチ。その後、無地のうちわに^{がんさい}下書きし、「顔彩」と呼ばれる日本画で使われる絵の具を使って色づけしていきます。学校で使う水彩絵の具とは異なり、にじみやすく、色の塗り重ねにコツがいるため、苦戦する様子



も見られます。完成が近づくと、先生が秘密兵器「金箔」を取り出しました。金箔を細かく砕いてふりかける「^{すなご}砂子」という技法を使って、うちわを仕上げます。きらきらした金箔に皆、大盛り上がり。裏面全体を砂子で仕上げる強者もいました。顔彩や金箔といった本格的な素材を使った貴重な体験をすることができました。（角和裕子）

博物館実習

8月28日（水）～9月5日（木）の8日間にわたる博物館実習には、8大学8名が参加しました。昨年度に引き続き、文化財係、民家園係と連携し、様々な分野の博物館業務を体験してもらいました。天気には恵まれませんでしたが、史跡見学や昔の地図を使ってのまち歩きなど、館外での活動も実施。まち歩きでは、途中、国の登録有形文化財となっている建物を訪ね、内部の見学と、所有者ご自身による解説までお伺いすることができました。

郷土資料館としては少し残念なことですが、実習生の多くは、博物館とは直接関わりのない進路に進みます。それでも、「大学の講義ではわからなかった博物館の実際を知ることができた」「博物館の運営は、様々な人の協力で成り立っていることがわかった」など、何かしら実習ならではの気づきを得ています。実習生は、将来の博物館の強力な理解者になると信じています。（角和裕子）



資料館だより No. 80

発行年月日 令和6年10月25日

編集発行 世田谷区立郷土資料館

〒154-0017 世田谷区世田谷 1-29-18

☎ 03-3429-4237 FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No. 2291